

長野五輪金メダリスト 原田雅彦氏と考える、札幌の雪と子どもたちの未来

1998年長野オリンピック金メダリストであり、現在は全日本スキー連盟(SAJ)会長を務められている原田雅彦さんに、札幌の雪の魅力やウィンタースポーツの素晴らしさについてお話を伺いました。原田さんは、2026年ミラノ・コルティナ冬季五輪の日本選手団副団長に選任されるなど多忙な公務の傍ら、札幌市のウィンタースポーツ体験会などで子どもたちと直接交流を続けています。今号では、原田さんの考える雪の魅力についてのメッセージをたっぷりお届けします。

故郷、上川町の雪が教えてくれたこと

私の故郷である上川町は雪が非常に多い地域でした。家のすぐ裏には小さなスキー場があり、スキー場からそのままスキーで滑って帰ってこられるような環境でした。本格的にジャンプを始める前から、小さな山を作ってスキージャンプの真似ごともしましたし、そういった雪遊びの思い出しかないくらい、とにかく雪で遊びましたね。

他のスポーツではなくスキージャンプに魅かれたのはやはり「空を飛ぶ」ことへの憧れでした。ジャンプ少年団の子どもたちが飛んでいるのを見て、「自分も飛んでみたい」という興味から、ジャンプを始めました。

初めて飛んだ時はものすごく怖かったです。でも、いざ飛んでみたら、それはもう気持ちよかったのを感じています。最初に飛んだのはわずか4メートルほどでしたが、自分としてはフワッと体が遠くまで飛んだと感じたんです。そこからは「もっと遠くに飛びたい」という思いで、ずっとジャンプ競技を続けてきました。



中学3年生でノルディックスキージュニア世界選手権に出場。右から2人目。(1984年:ノルウェー)

「失敗」から学んだ仲間の大切さ

競技人生の中でも強く心に残っているのが、1998年長野オリンピックの団体戦です。我々は万全の体制で臨み、前評判でも金メダル確実とされていましたが、あの日は想定外の猛吹雪でした。

1本目、降り積もる雪で助走のスピードが出ず、私は79.5mという致命的なショートジャンプに終わりました。チームは4番手に転落し、金メダルどころかメダル獲得すら難しい状況となりました。

このまま吹雪が続けば1本目の結果で競技終了となる可能性がありました。私たちはとにかく、「2本目を飛ばせてください」と祈る思いでした。条件さえ揃えば絶対逆転できるという自信があったからです。

競技続行の可否を決めるため、リレハンメル五輪の戦友である西方選手らテストジャンパーの方たちが、猛吹雪の危険なコンディションの中、命がけでジャンプ台を飛んでくれました。彼らが勇気をもって飛び続けてくれたことで、2本目が実施されることが決まったのです。私たちは、道をつないでくれた仲間や、裏方の方々への感謝しかありませんでした。

2本目、岡部選手が137.0mの大ジャンプでトップに立ち、そして私も、1本目とは比べものにならないほど助走のスピードが上がった状況で、開き直って飛び、岡部選手に並ぶ137.0mを記録しました。リレハンメルからの重いプレッシャー、1本目の失敗、そのすべてを晴らすことができたジャンプでした。着地後はほっとしすぎて、立ってられないような状態でした。

最後に飛んだ船木選手に全てを託したわけですが、腰は抜け、まともに声は出ないという状態だったので、私が「フナキ〜」と祈るように声を絞り出したのがテレビで何回も使われているわけですね。あのときは半ば放心状態ではありましたが、心の中には仲間への信頼がありました。

雪は札幌の宝物

除雪の大変さなどから、雪は「厄介者」と感じられる側面があるかと思いますが、世界的に見ると、札幌の雪は宝物なんです。私は世界中を転戦してきましたが、本当に「冬の競技をやっているな」と感じられるのはこの札幌だけになってきたのではないかと感じています。ヨーロッパでは、気候変動の影響で雪が減り、ほとんどの会場で人工雪を使っています。そんな中、札幌のように大都市にありながら、自然雪が豊富に降り、これほどのウィンタースポーツ施設が整っている環境は他にはありません。海外の選手たちは札幌に来ると、「雪があって素晴らしい!」と、とても喜んでくれます。

先生方から子どもたちに、「雪を楽しんじゃえ」と伝えて欲しいですね。積もった雪に足跡を残して遊んだり、ソリ滑りを楽しんだり。夏にはできない雪の日の楽しみがたくさんあります。北海道の雪は、世界中の人たちが羨むほどのパウダースノーで、可能性に満ちています。ぜひ、北海道の宝物である雪を楽しんでほしいです。

雪国のバトンを、未来の子どもたちへ

地球温暖化の影響もあり、世界的に雪が少なくなっていることを懸念しています。大切な宝物である札幌の雪を未来に残すために、私は、身の周りの小さなことから取り組んでほしいと思っています。例えば、ゴミを減らす、マイボトルを持ってスキー場に行くなどです。大きなことをしようと思うと大変ですが、身近な小さな行動でしたらみんなで取り組んでいくことができます。みんなの小さな行動で、環境問題の解決に取り組んでいきましょう。

札幌のみなさんへメッセージ

札幌市のウィンタースポーツ体験会などで、子どもたちと直接触れ合う機会をいただいております。その際には「子どもたちに雪の楽しさを感じてもらいたい」という思いで取り組んでいます。私どもスポーツ団体としては、



原田 雅彦(はらだ まさひこ)さん
1968年生まれ、北海道上川町出身。1993年のノルディックスキー世界選手権ノーマルヒル個人優勝、97年の同選手権ラージヒル個人優勝、98年長野オリンピックでは団体ラージヒルで金メダル、個人ラージヒルで銅メダルを獲得。2006年に現役を引退し、現在は雪印メグミルクスキー部のアドバイザー。24年10月に全日本スキー連盟会長に就任。25年9月、第25回オリンピック冬季競技大会(2026ミラノ・コルティナ)の日本選手団副団長に選任される。

スキーを通じて子どもたちの役に立ちたい、雪やスキーの魅力をもっと伝えたいと考えています。

初めてウィンタースポーツを体験するような子どもたちが、キラキラした目で楽しむ姿を見ると、改めて雪やスキーの魅力を感じます。子どもたちがウィンタースポーツに親しむ姿を見て、親御さんたちにももう一度雪やスキーを楽しんでもらえたら最高ですね。

私はスポーツを通じてたくさんの人に出会いました。いろんな人の意見、考え方の違いを聞いて、人として成長することができました。子どもたちにも、様々なことへの挑戦を通じて、自分の世界にこもらず、いろんな人に出会う機会をもってほしいと思います。たくさんの人と出会う中で、自分の可能性を広げていってください。

これからも、札幌の雪、そしてウィンタースポーツへの応援をよろしくお願ひします。



今回の取材者:左から、栗原 聡太郎 教諭(札幌市立芸術の森小学校)、谷藤 歩 教諭(田中学園立命館慶祥小学校)、右端、坂 幸次郎 推進担当係長(札幌市建設局土木部雪対策室事業課)

世界一の除排雪システムを支える3本の矢

札幌市は1年間で約5mもの雪が降る豪雪地帯です。人口が100万人以上の都市でこのように雪が降る地域は世界で他にありません。冬の生活を支える札幌市の除排雪のシステムはまさに世界一です。今回、除雪センター・土木センター・雪対策室の方々にインタビューを行いました。見えてきたのは、世界一の除排雪システムを支えるプロフェッショナルな仕事の流儀でした。



除雪センターのお仕事

除雪センターの方々は出勤前にどのような準備をされているのでしょうか。

除雪をする準備と市民からの要望に対応する準備を主に行っています。除雪車は毎日点検しています。エンジンを温めている間の30分くらいの間にライトが点くのか、タイヤの空気が入っているかなどチェックリストをもとに一つ一つ確認しています。また、万が一のことを考えて予備の除雪車も準備しています。もちろん、予備の除雪車も毎日点検し、すぐに交換できるようにスタンバイしています。

市民からの要望に対応する準備とはどのような準備なのでしょうか。

市民の方々から「ここに雪を置かないでほしい」「間口に雪を置かれて困っている」など、さまざまな要望が寄せられます。私たちが担当しているエリアだけでも、年間1,000件前後の要望や苦情が届きます。いただいたご意見はすべて記録に残し、土木センターや雪対策室の担当者とも情報を共有しています。こうすることで、同じ事例を繰り返さないように気をつけています。

天気予報などの情報を出動のギリギリまで確認していると聞きました。1日にどのくらい確認しているのでしょうか。

天気予報は何度も確認します。数には表せないほどです。出動のギリギリまで確認し、気象庁、テレビ局、インターネットなどさまざまなメディアから発信される天気予報を集め、それらの情報を照らし合わせながら雪が降る程度を判断しています。

除排雪作業の仕事をしていて大切にしていることは何ですか。

市民の方々や信頼関係を構築したいという思いは、常に持っています。オペレーターには、「頭に来ることがあるかもしれないけれども、市民の方々や信頼を構築することができれば、多少のことは理解していただけるし、作業をお願いされた場合でも気持ちよく除雪作業ができる。だから、除雪センターは市民と信頼を構築できる唯一の立場にあるんだぞ」と、伝えています。また、札幌市の防災を支える一翼を担っているというプライドをもって業務にあたっています。

土木センターのお仕事

土木センターの方々は区内道路除排雪の実行計画を立てる仕事をされていると聞きました。具体的にはどのような業務を行っているのでしょうか。

私たちは、除雪を担当する事業者の方々が、どの道路をどのように除雪するかといった具体的な作業計画を立てています。その際には、何kmの区間を除雪するか、作業回数はどのくらいか、どの機械が必要かといった点まで細かく計画します。この計画づくりには、およそ1か月ほどかかります。しかし、その根拠となる過去の実績データは常に整理・蓄積しており、必要に応じて振り返られるようにしています。こうしたデータを積み重ね、分析しているからこそ、計画を約1か月でまとめ上げることができるのです。



清田区南地区道路維持除雪JV
株式会社日栄建設 企業体総括
後藤 悟 氏



札幌市清田区土木部 維持管理課 維持係
近藤 遥平

他にも道路パトロールを行っていると聞きました。具体的にどのようなパトロールを行っているのでしょうか。

専門の職員が日中にパトロールを行い、道路に穴が開いていないかなど、異常がないかを確認しています。ポットホールと呼ばれる道路の穴は、車のパンクの原因となるため、見つけ次第すぐに補修するようにしています。多いところでは一つの交差点に10カ所以上発生することもあり、対応は大変な作業です。また、こうした道路の異常に関する情報は、除雪センターだけでなく、警察署や消防署、地域の方々からも寄せられるようになっています。

「情報共有」は除雪センターの方々も大切にしているとおっしゃっていました。土木センターとしてはどうでしょうか。

土木センターとしても、除雪センターと情報共有は大切だと考えています。土木センターには、市民の方々からさまざまな要望が寄せられます。その内容を除雪センターと共有することで、「この道路の除雪は適切に行われたのか」を確認したり、「このような要望があったので、次回の作業では改善に努めましょう」といった対策を講じたりすることができます。同じ苦情や要望を繰り返さないようにするためにも、双方で情報を共有し合うことが大切だと考えています。

土木センターの方々が仕事を行う上で大切にしていることはなんですか。

一言で言うと、「市民に公平な行政サービスを提供すること」です。私たちは、さまざまな市民の方々の願いに丁寧に耳を傾けていますが、すべてに応えることにはどうしても限界があります。除雪センターの人員にも限りもありますし、予算にも限りがあります。怒鳴られながら要望を受けることもあります。まずはその方が本当に伝えたいことをしっかり汲み取り、そのうえで状況を判断します。そして、個人的な要望にとどまる場合には、お断りすることもあります。それでも、いただいた要望については、必ず現地を見に行くようにしています。もちろん、人数や時間に限りがあるため、すぐに対応できない場合もありますが、実際に自分の目で状況を確認することは、市民に対する公平なサービスの1つだと考えています。

雪対策室のお仕事

雪対策室では、雪対策に関わる計画を立てたり、予算を管理したりしていると聞きました。具体的にはどのようなことをしていますか。

雪対策は、札幌市が策定した「札幌市冬のみちづくりプラン2018」に基づいて進められています。この計画には、2018年から2027年までの10年間にわたって、札幌市が目指す雪対策の方向性が示されています。私たちは、長期的な視点のもと、このプランに記載された取り組みの一つでも多く実現できるように、計画と実行を重ねています。現在は、次期「冬のみちづくりプラン」の策定作業に取り掛かっているところです。少子高齢化や人口減少、作業員の不足、税収の減少など、多くの課題が山積するなかで、札幌市の除排雪システムをどのように維持・発展させていくかについて、有識者や市民の方々など、さまざまな立場の方と議論を重ねています。

予算の管理とは具体的にどのようなことをしているのでしょうか。

令和7年度の除雪予算は約285億円で、その用途はすべてあらかじめ決められています。しかし、雪対策は、自然が相手であるため、必ずしも計画通りに進むとは限りません。例えば、除雪の予定を15回としていても、実際には20回行わないとしない場合もあります。そのため、現在どの程度の除排雪費を使用しているのかを常に把握し、管理する必要があります。例年と比べてどれほど予算を使用しているのか、除雪車の出動回数はどれくらいか、といった点を日々確認しています。「お金がないから除雪できません」という状況はあってはならないので、必要に応じて補正予算の編成を検討したり、国に対して補助金や交付金の要望をしたりと、慎重な予算管理を行っています。

雪対策を行う上でどのようなことを大切にしていますか。

現在、私たちは次期「冬のみちづくりプラン」の策定を進めています。除排雪は市民の生活を守るために行うものであり、その除排雪を持続的に続けていくためには、持続可能なシステムの構築や、除雪機械の一人乗り化の推進、限られた財源の中での予算編成など、大事なことがたくさんあります。どの取り組みを優先するべきか、順位づけをすることは容易ではありません。私たちの仕事は、立場が変われば求められる役割も変わります。しかし、その時の自分に与えられた仕事の目的を考えて、全力で取り組むことが大切だと考えています。雪対策室の一員として「雪学習」に関わる中で、子どもたちに「札幌の除排雪が世界一だ」とわかってもらえることが大切だと思うようになりました。札幌の除排雪システムの価値を知った子どもたちがやがて大人になり、雪対策だけでなく、札幌市全体をよりよくしようとする市民として成長して欲しいと願っています。

【取材・原稿執筆】表面：谷藤 歩 教諭(学校法人田中学園 田中学園立命館慶祥小学校)、裏面：栗原 聡太郎 教諭(札幌市立芸術の森小学校)



このニュースレターや冬や雪に関する指導案等は札幌市役所HPから、ダウンロード可能です。

【ホームページ】<https://www.city.sapporo.jp/kensetsu/yuki/yukigakushu/>

校務・教育システムのポータルサイトからも閲覧可能!

【発行・お問合せ】札幌雪学習プロジェクト事務局(札幌市建設局雪対策室事業課) TEL:011-211-2662 FAX: 011-218-5141

雪に関する写真や動画等、いろいろあります!

札幌雪学習

検索

雪学習HPはこちら

